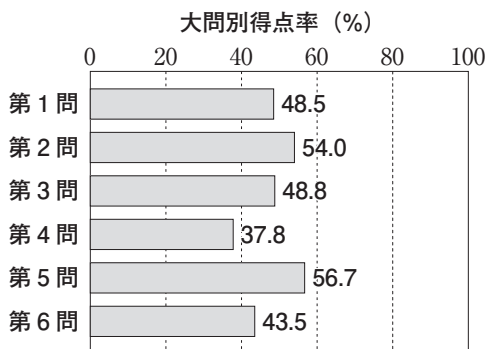
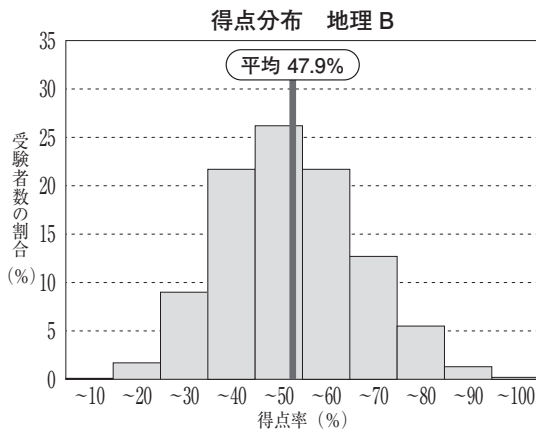


地 理 B

まずは基礎知識を身につけ、問題演習で思考力を高めよう！

I. 全体講評

受験学年の平均点は47.9点であった。今年センター試験本試験の平均点67.99点とは20点以上の開きがある。センター本番までおよそ半年となり、さらなる努力が必要である。特に高3生の学習不足が明らかであり、高卒生との平均点の差が大きかった（高3生は47.5点、高卒生は56.0点）。高卒生がそれなりの正答率だった基本問題で高3生が苦戦したケースも多い。半年という時間は長いようで短く、しっかりとした学習計画を立てて、効率的に取り組んでいかないとあっという間に過ぎ去ってしまう。Ⅲ. 学習アドバイスを参考にし、高3生も、そろそろ高卒生のように地理の学習にも本腰を入れよう。まずは教科書と図説資料集で基礎知識を身につけ、過去問やセンター型問題集の演習で思考力を高めていきたい。



Ⅱ. 大問別分析

第1問 世界の自然環境と自然災害

早めに気候グラフの読図に慣れ、気候と植生・土壌の関係の基礎を学んでおくこと。

大問全体の平均得点率は48.5%であり、この時期としてはやや物足りない結果となった。基本問題である問4、問5の正答率がそれぞれ32.4%、40.8%と高くなかったためである。問4はハイサーグラフの気候区をサバナ気候区と特定した上で、その植生の特徴を述べた文を選ぶ問題であった。さほど難しくはないはずであるが、高卒生でも正答率は36.0%であった。高3生の正答率も32.3%と低い。早く気候グラフの読図に慣れ、気候と植生の関係について基礎を学んでおきたい。問5は、高3生と高卒生の差がやや開き、前者の正答率が40.2%、後者が52.3%であった。高3生の多くが、褐色森林土について述べたサと、プスタについて述べたスについて、どちらがフランスに該当し、どちらがハンガリーに該当するかを判断出来なかった。このレベルの問題を確実に正解できるよう、気候と土壌の分布についてしっかり復習しておこう。

第2問 農林水産業

マレーシアにおける天然ゴムから油やしへの転換は重要なので、頭に入れておこう。

大問全体の平均得点率は54.0%であり、6つの大問中で2番目に高かった。まずまずの結果が出たと言えよう。全体的によく出来ている中で問4の正答率が21.6%と低かった。マレーシアでは、老木化の進む天然ゴムから、パーム油需要の高い油やしへの転換が進んでいるが、このことを未だ知識として頭に入れられていない受験者が多かった。重要なことなので、ここでしっかりと学んでおくこと。

第3問 生活文化と都市・人口

過去問やセンター型問題集の演習で、統計図表問題を読み解く思考力を高めよう。

大問全体の平均得点率は48.8%であった。問4

の正答率が24.8%と低かったが、メキシコシティの環境問題や住民の住み分けなどに関する深い知識と理解を必要とするハイレベルな問題であった。メキシコシティは頻出の都市なので、解説を読んでよく復習しておくこと。問5は、誤答③の選択率53.1%が、正答率35.1%を大きく上回ってしまった。首都圏>近畿圏>中京圏の順に割合が高い③と④のうち、より首都圏、近畿圏の比重が大きい④を「大学生の数」に該当するグラフとして選ぶ思考力の必要な問題であったため、この種の問題を考える力を既に身につけてきた高卒生の正答率42.2%が、高3生の34.8%を大きく上回った。高3生も、過去問やセンター型問題集の演習に繰り返し取り組み、統計図表問題を読み解く思考力を高めていこう。

第4問 アメリカ合衆国とカナダ

平均得点率が低く、残念な結果となった。統計図表問題を読み解く力を養おう。

大問全体の平均得点率は37.8%であり、6つの大問中で最も低かった。残念な結果が出たと言わざるを得ない。統計図表の読み解き問題である問4、問5、問6の正答率がいずれも低かった（それぞれ27.3%、18.4%、31.0%）。このうち問4は、西岸、内陸、東岸の気候の違いを認識しているかを問う基本問題であった。問6は、先進国の発電構成やCO₂排出の実態を把握しているかを確かめる標準問題であった。問4・問6レベルの問題は、半年後のセンター試験本番までには確実に解けるようにしておきたい。問5は、輸出に便利な臨海の州を木材伐採量の多い地域と判断出来るかを試すハイレベルな問題であったが、過去問やセンター型問題集の演習で思考力を養い、このレベルの統計図表問題を読み解けるようになると、得点力が上がってくる。

第5問 青いバナナ

頻出のヨーロッパ関連の問題でよい結果が出た。このまま得意分野に育てよう。

大問全体の平均得点率は56.7%であり、6つの大問中で最も高かった。ヨーロッパに関わる内容は、センター試験のみならず、二次・私大入試でも頻出であるが、このような重要分野で好結果が出たことは喜ばしい。このまま得意分野に育てよう。今回はヨーロッパの政治経済の中心地である青いバナナを取り上げたが、北欧、南欧、東欧などの地域について

でも、しっかりと学んでおきたい。

第6問 地域調査（鳥根県と鳥取県）

地形図読図の問題の出来が悪かった。頻出なのでやや難問でも対応できるように！

大問全体の平均得点率は43.5%であり、6つの大問中で2番目に低かった。地形図読図の問題である問2と問3の正答率が低かったためだ（それぞれの正答率は5.9%、25.6%）。問2は、砂丘を海側にした、砂丘を背にする低地に、風の通りが良い場所に置かれるはずの風車が置かれている景観を思い浮かべ、違和感を覚えることが出来さえすれば、④を誤文と判断出来たはずだ。地形図読図に際しては、景観をイメージする力が必要となる。また、正文である②を誤文と判断した受験生が46.0%もいたが、水田の古い地図記号を知らず、1901年の地形図では、沖積平野が荒地か、あるいは湿地にもなっていると考えてしまったのであろう。現在は使われなくなった地図記号でも、古い水田、桑畑、工場の地図記号などはきちんと頭に入れておきたい。問3は、正文の①を誤文と判断した受験生が43.2%もいたが、くにびき大橋の北に延びる幹線道路の周囲にも建物の地図記号が見られるため、幹線道路が通されたのは、建物の密集地から外れた場所ではないと誤解してしまったのであろう。今回の地形図読図の問題は、地図記号や等高線をやや細かく読み取り、かつ思考力を働かせて解かなければならないハイレベルな問題ではあったが、地形図読図の問題はセンター試験にはほぼ毎年出題される重要問題である。過去問やセンター型問題集に積極的に取り組み、やや難しい問題でも対応できるだけの実力をつけよう。

Ⅲ. 学習アドバイス

まずは、基礎知識を習得することに専念すればよい。ただし、地理は暗記科目ではないから、用語集や地図帳に載っている語句・地名を丸暗記するような学習は必要ない。教科書を丁寧に読み、図説資料集に載っている地図、グラフ、写真に関心を抱き、それらの解説に書かれた内容を理解すればよい。地理はたくさん暗記することよりも、重要事項を正確に理解することの方が重要な科目である。例えば、世界中の砂漠の名称を覚えることよりも、砂漠の成

因（中緯度高圧帯の影響，海からの隔たり，寒流の影響，山地における下降気流の影響など）を理解しておくことの方が重要である。

センター試験まで約半年となった。模試の見直しで基礎知識の不足を自覚した受験者は，自然，産業，生活文化，都市，地誌…のように，高校地理の全分野を網羅した問題集に取り組むとよい。その際，積極的に教科書，図説資料集，用語集などに目を通し，完全解答を作るつもりで取り組もう。そうすれば，高校地理の基礎・重要事項が自ずと頭に入ってくる。一方，問題を論理的に解く思考力が弱いと感じた受験者は，過去問やセンター型問題集の演習に取り組んでみよう。その際，しばらくは60分の試験時間にこだわらなくてよいから，曖昧に選択肢を特定せず，根拠を明確にしてから正解を選ぶようにする。正解以外の選択肢についても正誤や該当する項目を全て特定するよう心がける。このような練習を繰り返せば，正解に至るための思考力が徐々に高まっていくだろう。